

第6学年2組 社会科学習指導案

授業日 平成27年10月23日(金) 3校時
 授業者 附属新潟小学校 教諭 大矢 和憲
 会場 6年2組教室

1 単元名 日本近代化と条約改正 —明治時代—

2 本単元の価値

本単元は、小学校学習指導要領解説社会編6学年の内容(1)のキに準拠して設定したものである。

(1) 我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする。
 キ 大日本帝国憲法の発布、日清・日露の戦争、条約改正、科学の発展などについて調べ、我が国の国力が充実し国際的地位が向上したことが分かること。

小学校の歴史学習では、それぞれの時代にどのような課題があり、どのように課題を解決し、その結果社会や国がどのように発展したかということを中心に学ぶことが重要である。

幕末に欧米諸国と締結した、いわゆる不平等条約の改正(以下:条約改正)は、当時の我が国にとって最大の課題であった。そして、条約改正を果たすために、明治政府は欧米の政治の仕組みや制度、技術や文化などを取り入れ、急速に近代化を進めた。条約改正が果たされた要因は、岩倉使節団に始まる条約改正交渉の努力や当時の世界情勢、陸奥宗光や小村寿太郎の交渉手腕、産業の発達や日本人の活躍など様々考えられるが、中でも最も大きな要因は、我が国が憲法をもつ近代国家になったことと、日清・日露二つの戦争に勝利したことである。欧米諸国が日本の近代化と国力を認めざるを得ない状況になったからこそ条約改正が果たされ、欧米諸国と対等な国家と認められたことをとらえさせたい。また、条約改正に成功した陸奥宗光と小村寿太郎の努力だけではなく、当時様々な人々の努力があったからこそ、日本の近代化が進み、国力が充実し、欧米諸国と対等な地位になることができたことを感じさせたい。

そこで、本単元では、条約改正が果たされた要因を多面的・多角的に追究させ、条約改正の意味をとらえさせる。具体的には、条約改正という最大の課題を解決できた要因を、当時の我が国の様々な出来事(事実)から考えていく学習を設定する。そして、社会や国家の課題、課題解決の要因、結果を総合して、条約改正の意味をとらえる子どもを目指す。こうして条約改正の意味をとらえることで、よりよい社会・国づくりの概念(社会的・国家的な課題に対して、人々が願いや意図をもって行動し解決することによって、社会や国が発展するという)を獲得していくことができる単元である。

3 本単元で目指す姿と「中核的な知識や技能」「学びをつなぐ力」

(1) 目指す姿

「大日本帝国憲法の制定や産業の発達、日清・日露戦争の勝利、日本人の活躍など、日本の近代化が進み、外国に認められるほどの国力をつけた。だから、今まで苦しんでいた不平等条約を改正することができ、外国と対等になることができたんだ」などと、社会や国家の課題、課題解決の要因、事象の結果を総合して、条約改正の意味をとらえる子ども。

(2) 「中核的な知識や技能」

社会や国家の課題、課題解決の要因、事象の結果を総合してとらえた条約改正の意味

(3) 「学びをつなぐ力」

- ① 関係付けるすべを用いて、既有事項から設定した追究の視点を基に、学習問題の解決につながる出来事(事実)を収集・判断する力
- ② 比較する・関係付けるすべを用いて、出来事(事実)を整理したり結び付けたりして条約改正につながる要因(課題解決に必要な情報)を考える力



4 指導計画 全8時間(240) ※別紙単元カード参照

5 指導の構想

子どもは、これまでに、明治維新や文明開化、富国強兵の政策によって、我が国が欧米の制度や文化を積極的に取り入れて急速に近代化したことを学習している。また、前単元の学習から、幕末に欧米諸国と結んだ不平等条約が当時の我が国にとって最大の課題であると感じている。そして、前時にノルマントン号事件やウェブスター事件、千島艦事件について知り、不平等条約に不満を高めるとともに、早期の改正を望んでいる。このように、子どもは当時の人々の思いや願いに身を置いて不平等条約改正の必要性を考えている。そして、不平等条約はいつ、どうやって改正できたのか関心を持っている(C0)。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

条約改正に失敗していた事実と、条約改正に成功した事実をまとめた年表（「対象①」）を提示し、気付いたこと、疑問に思うこと、これからみんなで考えたいことを問う。

条約改正の意味について追究する学習問題を設定させるために、まず、**条約改正に失敗していた事実と、条約改正に成功した事実をまとめた年表（「対象①」）**を段階的に提示し、気付いたことを問う。子どもは「対象①」を見て、何度も条約改正交渉をしてきたが失敗していた事実や条約改正ができた事実、領事裁判権と関税自主権について別々に改正されている事実、などを読み取り発表する。

次に、読み取った事実から疑問に思うことを問う。子どもは、「なぜもっと早くに条約改正ができなかったのか」や「何度も条約改正に失敗していたのに、なぜ1894年と1911年になって陸奥宗光や小村寿太郎が条約改正に成功したのか」「なぜ別々に改正されているのか」などと疑問を発表する。このとき、別々に改正されている事実については、事実として別々にしか改正できなかったと説明する。

最後に、これからみんなで考えたいことを問う。子どもは、比較する・関係付けるすべを用いて、疑問を焦点化し、「これまで何度も失敗していたのに、なぜ、陸奥宗光や小村寿太郎は不平等条約の改正に成功したのだろうか」と、条約改正ができた要因を追究する学習問題を設定する。

学習問題を設定した子どもは、既有事項を基に学習問題について予想を始める。この場面で学習問題に納得し、学習問題に正対する初発の自分の考えを記述できた子どもを問いをもった姿とする。

働き掛け2

子どもの予想から追究の視点を設定し、どのようなことが分かればよいか問う。

既有事項を基に、課題解決に必要な情報を収集・判断していくことができるようにするために、まず、子どもの予想を発表させる。子どもは、「対象①」から学習問題を設定し、関係付けるすべを用いて学習問題の解決につながりそうな既有事項を想起して予想をしている。つまり、このときから、子どもは学びをつなぐ力を発揮して学習しているのである。具体的には、「既有事項を基に、条約改正が成功した要因」について考え始めている。

子どもは、既習の明治維新の意味や不平等条約と明治政府の政策の知識などから「①日本が近代化してきたから、外国がそれを認めて条約改正ができた」「②日本が外国と同じくらい強くなったから、条約改正ができた」などと予想する。下線部分は、学習問題の解決と本單元における中核的な知識につながる重要な視点である。

設定した視点について、さらに具体的にどのようなことがあったと思うかを問う。「対象①」には、条約改正に失敗していた頃の出来事（既習の事実）は年表内に示してあるが、条約改正に成功した頃の出来事（事実）は載せていない。そのため、子どもは、学習問題について考えるために出来事（事実）が知りたくなる。そのような子どもに、どのようなことが分かればよいか問う。子どもは、自分たちが予想しているようなことが本当にあったのか、分からない部分の出来事（事実）が分かればよいかと考え、根拠となる出来事（事実）を探そうと資料集や教科書などを調べ始める。

このような子どもに付箋紙を配付し、調べた出来事（事実）のみを記述させる。子どもは、関係付けるすべを用いて、既有事項から設定した追究の視点を基に、学習問題の解決につながる出来事（事実）を収集・判断し、次のような出来事（事実）を付箋紙に記述する（「**学びをつなぐ力**」①）。

- 近代国家の象徴である大日本帝国憲法を發布し、アジアでいち早く憲法をもつ国になった。
- 第1回帝国議会（国会）が開かれ、大日本帝国憲法に基づく議会政治が始まった。
- 日清戦争・日露戦争に勝利した。
- 韓国を併合し植民地にした。
- 産業が発達し、綿糸の輸入国から輸出国になった。（工業製品の生産量が増えた、生糸の生産高が世界一になった、重工業が発達した）
- 国際社会で活躍する日本人が増えた。 など

働き掛け3

調べて分かった事実とその解釈を問い、小グループで「コア・マトリクス2」にまとめさせる。

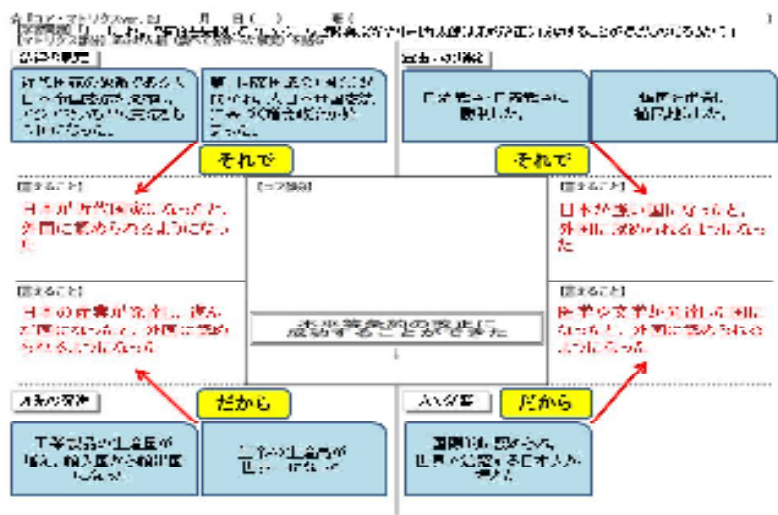
根拠となる複数の事実を結び付けて、条約改正につながる要因を考えることができるようにするために、まず、小グループに「コア・マトリクス2」（思考の可視化と自覚化を促すための補助教材）を配付し、調べて分かった事実とその解釈（事実から言えること）を問う。そして、「コア・マトリクス2」のマトリクス部分に付箋紙を貼らせ、その解釈を記述させる。この解釈が、条約改正につながる要因（課題解決に必要な情報）となる。

「コア・マトリクス2」には、右図のように学習問題と事象の結果を示しておく。事実とその解釈を問うことで、子どもは**比較する・関係付けるすべ**を用いて、**付箋紙に書いた事実を整理したり結び付けたりして事実の解釈を考える。**

そして、「日本が憲法を制定し国会を開く近代国家になったと、外国に認められるようになった（法律の制定）」「日本の産業が発達し進んだ国になったと、外国に認められるようになった（産業の発達）」「日清・日露戦争に勝利したり韓国を植民地にしたりして、日本が強い国になったと、外

国に認められるようになった（軍事力の増強）」「国際的に活躍する人が増えて、医学や文学が発達した国になったと、外国に認められるようになった（人の活躍）」などと、調べて分かった事実から、条約改正につながる要因（課題解決に必要な情報）を明らかにしていく（「学びをつなぐ力」②）。

小グループで解釈が出てきたところで、分かった事実とその解釈を発表させ、学級全体の「コア・マトリクス2」に書き込んでいく。子どもは、比較する・関係付けるすべを用いて、友だちの考えを補ったり、妥当かどうか判断したりしながら、条約改正につながる要因（課題解決に必要な情報）を練り上げる。



働き掛け4

学習問題についての結論を問い、「コア・マトリクス2」のコア部分を考えさせる。

子どもは様々な事実から、条約改正につながる要因を考えている。このような子どもに総合して考える思考を促し、条約改正の意味をとらえさせるために、「一体なぜ、条約改正に成功することができたのか。その結果どうなったのか」と、学習問題についての結論を問い、コア・マトリクス表のコアの部分の考え（結論）を記述させる。その後、学級全体で考えを交流させる。子どもは、比較する・関係付けるすべを用いて、当時の社会や国家の課題、課題解決の要因、事象の結果を総合して考え、「大日本帝国憲法の制定や産業の発達、日清・日露戦争の勝利、日本人の活躍など、日本の近代化が進み、外国に認められるほどの国力をつけた。だから、今まで苦しんでいた不平等条約を改正することができ、外国と対等になることができたんだ」などと仮説を立てる。しかし、子どもは自分たちの考えであるため結論の妥当性を確かめたくなる。

働き掛け5

陸奥宗光と小村寿太郎の条約改正交渉について分かる資料（「対象②」）を提示し、陸奥宗光や小村寿太郎が、なぜ、イギリスやアメリカとの条約改正に成功できたのかを問う。

子どもが考えた結論の妥当性を確かめさせるために、**陸奥宗光と小村寿太郎の条約改正交渉について分かる資料（「対象②」）**を提示し、どのようなことが言えるか問う。子どもは、資料から、陸奥宗光や小村寿太郎が、戦略的かつ粘り強く交渉を重ねたことや、当時のイギリスとの駆け引きがあったことなど、新たな情報を収集する。ここで、陸奥宗光や小村寿太郎が、なぜ、イギリスやアメリカとの条約改正交渉に成功できたのかを問う。子どもは、関係付けるすべを用いて、これまで考えてきたことと、新たな情報を再構成し、「やはり、大日本帝国憲法の制定や産業の発達、日清・日露戦争の勝利、日本人の活躍など、日本の近代化が進み、外国に認められるほどの国力をつけた。だから、今まで苦しんでいた不平等条約を改正することができ、外国と対等になることができたんだ」などと、**社会や国家の課題、課題解決の要因、事象の結果を総合して、条約改正の意味をとらえる子ども**になる。

子どもは一連の学習過程において「学びをつなぐ力」を発揮しているが、無自覚であることが多い。そこで、「学びをつなぐ力」の自覚を促すために、毎時間の学習後に「社会科日記」を書かせる。ここではふり返りの観点として、①「どのように何を学んだのか」自分の学習過程と、②考え方のコツを書くように指導する。①②の観点でふり返らせることで、子どもは、比べて・つなげて・まとめてなどと、自分がどのように考えてどのようなことが分かったのかを説明する。この姿が「学びをつなぐ力」を自覚した姿（Cn）である。

6 本時の構想（本時 4／8時間）

(1) ねらい

比較する・関係付けるすべを用いて、当時の社会や国家の課題、課題解決の要因、事象の結果を総合して、条約改正の意味を考えることができる。また、学習で発揮した「学びをつなぐ力」の有用性を自覚することができる。

(2) 主張（展開）3Q（45分）

このような子どもに（C0）

- 明治維新や文明開化、富国強兵の政策によって、我が国が欧米の制度や文化を積極的に取り入れて急速に近代化したことを学習している。
- 板垣退助、山際七司などの自由民権運動によって、政府が国会の開設を約束したことを知っている。
- 前単元の学習から、幕末に欧米諸国と結んだ不平等条約が当時の我が国にとって最大の課題であると感じている。
- 前時にノルマントン号事件やウェスター事件、千島艦事件について知り、不平等条約に不満を高めるとともに、早期の改正を望んでいる。
- 当時の人々の思いや願いに身を置いて不平等条約改正の必要性を考えている。

- 不平等条約はいつ、どうやって改正できたのか関心をもっている。

このように働きかけると【働き掛け1】

「対象①」を提示し、気付いたこと、疑問に思うこと、これからみんなで考えたいことを問う。

- 説明「みんなは明治時代の学習をしていますね。江戸時代の終わりから、明治時代の日本にとって、解決しなければいけない課題は何でしたか」「なるほど、ではみんなが今知りたいことはどんなことかな」
- ・指示「そう言うと思って、今日は出来事（事実）をまとめた年表を持ってきました。これからみんなに見せるので、まずは気付いたことを発表しましょう」
 - ※「対象①」：条約改正に失敗していた事実と、条約改正に成功した事実をまとめた年表をマスキングを外しながら段階的に提示する。
 - ※子どもが気付いたことを「対象①」に書き込む。
- ・指示「えーって反応がありましたね。それでは疑問に思ったことを発表しましょう」
 - ※子どもの疑問を板書する。
 - ※補助発問：「どうしてそう思ったの」
 - ※補助説明：「領事裁判権の条約改正と関税自主権の条約改正は、事実として別々にしか改正できなかったんです」
- 発問「いろいろな疑問が出たけれど、みんなはこれからどんなことを考えたいですか。どんな学習問題ができそうですか」「これからみんなで考える学習問題はこれでいいですか」
 - ※ 学習問題に納得できるか挙手させる。
 - ※ 学習問題を黒板に書き、ワークシートを配付する。
- ・指示「みんなの学習問題を書きましょう」
- 指示「この学習問題についてどんな予想ができるかな。今の自分の考えを、ワークシートの自分の考え①に書きましょう」

このようになり (C1)

条約改正に失敗していた事実と、条約改正に成功した事実から、比較するすべ・関係付けるすべを用いて、疑問を焦点化し、条約改正ができた要因を追究する学習問題を設定する。

- 「対象①」から気付いたこと、疑問に思うことを発表する。
 - ・ 不平等条約を改正しなければいけない。そのせいで日本は混乱しているんだから。
 - ・ 不平等条約のせいで日本は外国の言いなりになっているから、外国と対等になるためには、不平等条約を改正しなければいけない。
 - ・ 不平等条約はいつ、どうやって改正できたのか知りたい。
- ・ 明治時代になってすぐに、岩倉具視たちが不平等条約の改正交渉を始めている。
- ・ でも失敗している。
- ・ 次もやっぱり失敗している。
- ・ 日本はいろいろと近代化しているはずなのに、まだ不平等条約の改正に失敗している。
- ・ えーっ、また失敗している。なんでかな。
- ・ やっと不平等条約が改正できた。
- ・ 領事裁判権と関税自主権が別々に改正されているのはなぜかな。
- ・ なんで陸奥宗光や小村寿太郎は不平等条約の改正に成功したのかな。
- これからみんなで考える学習問題を設定する。
 - ◎何度も（不平等条約の改正に）失敗していたのに、なぜ、陸奥宗光や小村寿太郎は不平等条約の改正に成功したのだろうか（学習問題）。
- 学習問題について予想し、初発の考えをワークシートに記述する。
 - ・ 日本が近代化してきたから、外国がそれを認めたからじゃないかな。
 - ・ 日本が外国と同じくらい強くなったからじゃないかな。
 - ・ 憲法をつくったり、国会を開いたりしたからじゃないかな。
 - ・ 外国との戦争に勝ったからじゃないかな。

このように働きかけると【働き掛け2】

子どもの予想を交流させて追究の視点を設定し、どのようなことが分かればよいか問う。

- 指示「予想が書けたようですね。それでは、自分の予想を発表しましょう」
- ・発問「なるほどね。具体的にはどのようなことがあったと予想しますか」
 - ※補助発問：「どうしてそう思ったの」
- ・発問「ここに書いた予想は、簡単に言うるとどんな予想ですか」「じゃあここは？」
- ・説明「なるほどね。みんなは今このような予想をしていることが分かりました」
- 発問「それでは、これからどのようなことが分かればこの学習問題について考えられそうですか」
- 指示「それでは早速、資料集や教科書を使って調べてみましょう。もし、他にもほしい資料があったら先生に教えてください」
- ・指示「これから付箋紙を配るので、資料などを調べて分かった出来事（事実）だけを付箋紙に書きましょう」
 - ※付箋紙を配付し、一枚につき一つの出来事（事実）だけを書くように指示する。

このようになり (C2)

学級全体で追究の視点を設定し、根拠となる出来事(事実)を調べていく。

- 予想を発表し、追究の視点を設定していく。
 - ・外国が許可をするようになったんじょ。
 - ・日本が近代化してきたから、外国がそれを認めたんだと思う。
 - ・日本が外国と同じくらい強くなったからだと思う。
 - ・憲法をつくったり、国会を開いたりしたからじゃないかな。
 - ・外国との戦争に勝ったからじゃないかな。
 - ・外国に日本はすごいと思わせたんじゃないかな。技術の近代化とか。
 - ・外国がダメと言えない国になったんじゃないかな。軍が強くなったとか。
 - どのようなことが分かれば学習問題について考えられそうか考える。
 - ・年表には、条約が改正できた頃の出来事が書かれていないから、その辺りの出来事が分かれば考えられそう。
 - ・今予想していることが本当にあったかどうか分かればよさそう。
 - ・外国にすごいと思わせることがあったかどうか分かればいい。
 - 資料集や教科書で、学習問題の解決につながる出来事(事実)を調べ、付箋紙に書く。
 - ・近代国家の象徴である大日本帝国憲法を發布し、アジアでいち早く憲法をもつ国になった。
 - ・第1回帝国議会(国会)が開かれ、大日本帝国憲法に基づく議会政治が始まった。
 - ・日清戦争・日露戦争に勝利した。
 - ・韓国を併合し植民地にした。
 - ・産業が発達し、綿糸の輸入国から輸出国になった。(工業製品の生産量が増えた、生糸の生産高が世界一になった、重工業が発達した)
 - ・国際社会で活躍する日本人が増えた。 など
- ☆つなぐ力①：関係付けるすべを用いて、既有事項から設定した追究の観点を基に、学習問題の解決につながる出来事(事実)を収集・判断する力

ここから本時

このように働きかけると【働き掛け3】

調べて分かった事実とその解釈を問い、小グループで「コア・マトリクス2」にまとめさせる。また、学級全体で条約改正につながる要因を練り上げる。

- 説明「みんなは今、この学習問題について考えているところでしたね。そして、これまでに、資料で調べて分かったことを付箋紙に書いていますね。○先生、今日はこのようなスーパーアイテムをつくってきました。コア・マトリクス2です」

※「コア・マトリクス2」を提示する。

- ・発問「付箋紙にどのような出来事(事実)を調べて書きましたか。また、調べた出来事(事実)から、どのようなことが言えそうですか」
- ・指示「これからこのコア・マトリクス2を各班に配ります。付箋紙に書いた事実を基に、どのようなことが言えるかを話し合っ、マトリクス部分に書きましょう」
- ・説明「付箋紙はこの場所に貼りましょう。【言えること】のところに、出来事(事実)から言えることをプロッキーで書きましょう」

※各班に「コア・マトリクス2」とプロッキーを配付する。

※補足説明：「似ている内容の付箋紙は、同じ場所に貼りましょう」

「比べたりつなげたりしたときは、矢印を書いていきましょう。また、矢印の意味を言葉で書きましょう」

※補助発問：机間巡視をして、「なぜそのように考えたのか」「これらのことから、どのようなことが言えそうか」と問う。

※机間巡視をして、学級全体として追究の観点すべてについて、「外国と同じくらい強くなった」や「外国に認められるようになった」などという解釈(課題解決に必要な情報)が出そろったところで、次の指示を行う。

- ・指示「それでは、分かった事実とそこから言えることを発表しましょう」

※補助発問：「～さんは、このことをつなげて考えたのですね」

「みなさんは～さんの考えに納得ですか」「付け足しはありますか」

※全体の「コア・マトリクス2」に事実とその解釈を書き込んでいく。

このようになり (C3)

- 付箋紙に書いた出来事(事実)を整理したり結び付けたりして、条約改正につながる要因(課題解決に必要な情報)を考える。
 - ・このこと(付箋紙)とこのことはここじゃないかな。これも同じだよ。これはここだね。
 - ・これらのことから言えることは、日本が憲法を制定し国会を開く近代国家になって、それで外国に認められるようになったんじゃないか(法律の制定)。
 - ・ここで言えることは、日本の産業が発達して進んだ国になって、それで外国に認められるようになったんじゃないか(産業の発達)。
 - ・日清・日露戦争に勝利したり韓国を植民地にしたりして、日本が強い国になったから、外国に認められるようになったんじゃないか(軍事力の増強)。
 - ・国際的に活躍する人が増えて、医学や文学が発達した国になったから、それで外国に認められるようになったんじゃないか(人の活躍)。
 - ・そうだよ、いろいろと外国に認められるようなことがたくさんあったんだよ。

